論　文

文学で刻む日中戦争の記憶

――〝前線〟と〝銃後〟で作家は何を見、何を感じたのか――

田　中　　寛（大東文化大学外国語学部）

The Memory of the War between Japan and China as Reflected in Literature: What Authors saw and felt both on the "battle-field" and at the "home-front"

Hiroshi TANAKA

一．「戦争文学」研究の現在――戦争詩歌・短詩形文学からの視座

ここ数年、国際情勢、社会情勢を反映してか、戦争文学についての著作、アンソロジーが続いて刊行されている。文学の本質、人間性、記憶などをめぐる方法論の検証の一環として、戦争文学はきわめて包括的、かつ多面的な要素を持つ関心領域としてある[注(1)]。ただ、ひとくちに戦争文学といっても、そのジャンル、形式、スタイルは多種多様である。まず議論の切り口として戦争詩という文学創作の領域を考えてみたい。なかでも短歌、俳句といった短詩形文学はその簡潔な字数と表現に歴史書にはない真実を凝縮させている。俳句でいえば、渡辺白泉はその前衛的な句風によって戦争という時局を如実に表現し、あげくは言論弾圧の対象ともなったことはよく知られている[注(2)]。短歌では日中戦争が勃発するや『アララギ』などの歌誌は競うようにして戦場および銃後での心情を綴った。戦時下では報道ルポルタージュ、小説創作の中に交じって短歌、俳句なども多く詠まれ、それらは新聞紙上に掲載されたほか、歌集としても数多く出版された。川田順『史歌南北作戦』（一九四三）、同『史歌大東亜戦』（一九四四）はそれぞれ三千部出された。川田順はアララギ派歌人の重鎮で齋藤茂吉らの「愛国百人一首」（日本文学報国会編一九四三、毎日新聞社）一二人の編者でもあった[注(3)]。「詩歌」ではなく「史歌」としたところに作者の決意がある。短詩形文学はその簡潔な形式からも民間心情のな

かに浸透しやすい共鳴感があったといえよう。川田順の『史歌南北戦』からの数句を瞥見する。

盧溝橋　支那事変五周年の日に
盧溝橋に　支那兵の射ちし弾丸の　おと昨日のごとし　五年すぎぬ①
盧溝橋の　いくさ拡がるかをさまるか　息詰まり日々の　新聞は見き②
漁師らが　網かたげては往来する　永定河の岸　けふは想はむ③
吾が識れる　宋哲元は妻子つれ　この橋渡りて　逃げにけらしも④
堪へて来し　支那のいくさの五年は　まさにしるしあり　亜細亜を興す⑤

①は早くも五年が経った事変をふりかえり、「支那兵の射ちし」と中国が弾丸を発したかのような時局を詠っている。②は新聞の緊張した報道を見ながら一向に終息の気配がない事変の行く末を案じたもの。③は盧溝橋界隈の長閑な生活風景である。戦闘の最中、こうした情景描写が片時の戦争を忘れさせる時間でもあった。④は宋哲元という人物の戦禍の中での逃亡を詠ったもの、⑤は事変を「東亜新秩序」建設の聖戦とみてアジアの光明、振興を誓った歌となっている。出口の見えない泥沼化した戦場への視線の中にも支那兵、漁師、宋哲元、妻子といった人間の配置にも特徴が見える。戦線、戦闘、戦争を「いくさ」という大和言葉であらわした点にも注目したい。歌集には蒙彊、蒙古草原、黒龍江等を詠った短歌が収録されており、当時の戦争観の一端が窺える。本書の末尾に「戦争短歌について」の文章がある（傍点、原文のまま）。

ここに「戦争短歌」とは、発生期に於いては、前線将兵の詠を第一義とし、銃後一般の作を第二義としたこと勿論だが、時局深刻を加うるにつれて、国民皆戦いつつあるの自覚高まり、何事につけても前線・銃後の差別うすらぎつつある事を考えねばならぬ。予の戦争短歌は従来謂う所の第二義のものなること、申す迄もない。

「前線」「銃後」の意識一体化をはかる意味において、これら短詩形文学は大きな力ともなったが、これはまた戦争文学、創作が単に戦場の人間を描くのみならず、銃後の国民を鼓舞する意図もあった。そして創作への精神的な牽引、背景には日本人の日記、手記、兵士手帖などにみる旺盛な記録癖もあった[注④]。戦時期にはこうしたおびただしい数の短歌がつくられ、新聞紙上、文芸雑誌等にも掲載された。それらはまた戦場の兵士を鼓舞し、銃後の国民の戦意を高揚させるのに役立った。国民的歌人の北原白秋や詩人の三好達治、佐藤春夫らも数多くの戦争礼讃の詩を詠んだこ

とはよく知られている。次にあげるように、早いものでは「聖戦」一周年目（一九三八年）に出されている。

齋藤茂吉、佐々木信綱編『支那事変歌集』（讀賣新聞社、一九三八）／同編『支那事変恋歌集』（岩波書店、一九三八）／高知県教育会編『支那事変愛国歌集』（高知県教育会、一九三八）／大日本歌人協会編『支那事変恋歌集銃後編』（大日本歌人協会、一九四一）

時代が急を告げるや雑誌にも戦争歌詠が大半を占めるようになるが、なかでも満洲事変の翌年一九三二年に発刊された文芸同人雑誌『コギト』は保田与重郎、田中克己、伊藤静雄らを中心として、浪漫主義的気運のなかでドイツ浪漫派の影響を受けつつ、詩精神の昂揚をうたうなか、戦争はその土壌の鮮烈なモチーフとなった。また、歌集『アララギ』も岡麓、齋藤茂吉、北原白秋を中軸として散華的精神世界を創出したことは歌史上、ながく記憶にとどめなければならない。

太平洋戦争が火ぶたを切って落とされると、翌年一九四二年六月一八日には、三千五百名もの文学者が集い、日本文学報国会の発会式が行われ、短歌、俳句で宣誓がなされた。吉田英治氏の提唱により文学者報道班に対する感謝決議をなし万歳を斉唱、一路文学報国に突貫する決意を定めた（大阪毎日新聞一九四二・六・一九）。戦争が激しくなると、銃後の戦争への覚悟が強調されていき、新聞紙面にも緊張感が漂い始める。そうした〈馴れ〉、〈厭戦〉への戒めとして、新聞には多くの「戦時生活」「強兵健民」の記事とともに、「（戦時）短歌・俳句」も掲載された。日常の世界に巧妙に銃後の決意がうながされたのである。国内応募作品にまじって戦場からの投稿も寄せられている。齋藤瀏を選者にして次のような短歌が載っている（朝日新聞一九四三・三・二三掲載）[注(5)]。

傷重き戦友動かしつつ手当てする我が声いつか涙となり居る（故陸軍兵長　横田陽二郎）
戦地より名附けし兄のいとし児は父知らぬまま五歳になりぬ（北海道　西山松三郎）
飯盒に注射器煮つつ如何にしてもコレラ患者を助けむと思ふ（中支派遣　魚住孝義）

ここには戦場の史実をもうかがわせることに注目したい。銃後も飯を炊き、湯を沸かす。飯を炊き、菜を作る飯盒に消毒のために注射器を「煮て」いるのだが、コレラ患者が日本兵なの中国民衆なのかは明らかではない。前掲「支那事変」を詠った歌集はさらに広域に拡がって行き、次のような歌集、句集へと、まさに文学の奔流に組み込まれていくのである。

大日本歌人協会編『支那事変歌集』（大日本歌人協会、一九四一・一）／日本放送協会編『聖戦俳句選』（ラジオ新書76）、（日本放送協会、一九四二・七）／日本放送協会編『聖戦短歌選』（ラジオ新書89）（日本放送協会、一九四二・九）／岡山巌『聖戦短歌鑑賞』（育英書院一九四二・九）／水原秋櫻子編『聖戦俳句集』（石原求龍堂、一九四三・八）／日本文学報国会編『大東亜戦争歌集』（協栄出版社、一九四三・九）／日本文学報国会編『大東亜戦詩』（漢文）（龍吟社、一九四四・一〇）

戦時下ながら多くが三千部、五千部も刷られた。かくして「聖戦」「愛国」「殉国」という大義が国民心情として浸透していくのである。このほか、総力戦下ではさまざまな詩歌が詠われ、多くの出版物も出された。太平洋戦争末期に五千部も出された日本文学報国会編、『詩集大東亜』（一九四四、河出書房）はその代表的な集成である。そのなかで、作家井上靖は「山西へ」という詩を詠んでいる[注(6)]。亡き戦友「君」に語りかけ「日中戦争勃発の五年前、そして五年後の今とを対比させ、思いを新たにしようという決意を謳う（「／」は改行）。

そこには小さい丘や水溜まりがやたらに多く／名の知らぬ雑草がおひ繁り／いかにも地殻の表面といった感じの所だった。／そこに君は眠っている。／君は南京の陥落もハワイ爆撃も／輝く南海の大戦果も知らない。／「山西へ　山西へ！」／五年前の悲願を／君の魂は今尚號び続けているに違いない。

ひねもす吹き荒れた風が落ち／雲の切れ目から高い星がきらめき／五年前のあの時に似た夜がくると／きまって僕には君の声が聞える。／「山西へ　山西へ！」／夜の海峡を突っ走ってくる君の魂の號びが。

君の墓標の上高く／日ごと大陸の雲は浮び／鴉の大群は塵のように南下し／びょうびょうと五年の歳月は流れたが／君の號びは常に新しい／いま祖国の領土を巡って遠く北に南に／またみたみ一億の耐乏の生活の周囲にも／闘いとらねばならぬ／「山西の山山」は依然として聳え立つ。／くろい山頂をにらんで向かい立った／すべてはあの夜のごとくであれ／君の號びはそう語っているかのようだ。

あの南京の阿鼻叫喚の史実は語られず、「陥落」という、一方的で曖昧な二文字に封印されている。兵士には侵略の意味よりは聖戦、大義のための戦争観に突き動かされ、耐乏の一億の「みたみ」「仇敵」のために闘うという。その感傷の波濤が高まる胸にはかつて破竹の勢いだった五年前の叫びがよみがえる。ただ、これらの戦地詠、銃後詠にしろ詩文、短詩形にしろ、現実よりも感傷がまさり、詠嘆的であればあるほど戦場の実際の

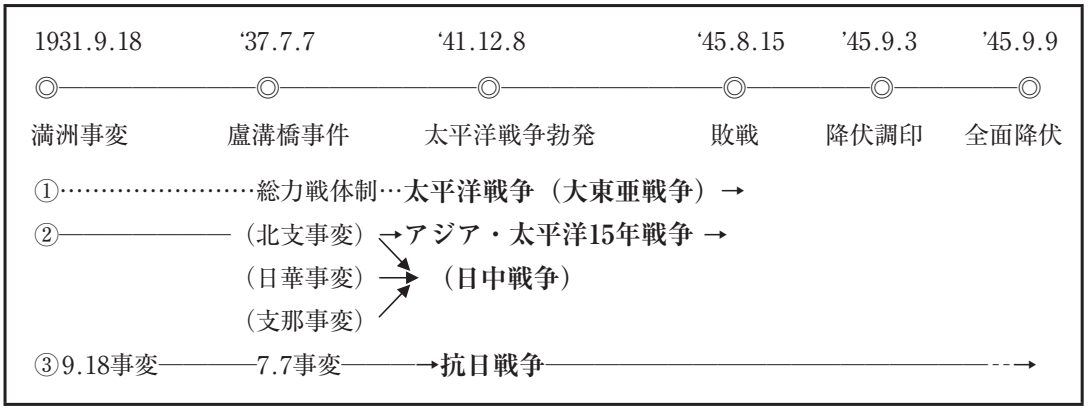

図 1　戦争の名称をめぐる日本側（①、②）と中国側の認識（③）

裏面は封印されてしまう。歌の世界では戦争が近代戦ではなく討伐戦、日本古来の武士合戦の延長のような「いくさ」的、万葉世界の「防人」的心情にも似た感情が迸っている。世界を相手に戦うというよりも感情の敵である。

中野（二〇一五）によれば「戦争と詩歌」の研究（戦争俳句も含む）は、東日本大震災後の詩的状況を考える際にも重要な視点であるという[注(7)]。日本人の戦争心情を理解するためにもこれらの文学史における「負」の遺産の考究に取り組む必要があろう。

二．戦争観と戦争の呼称―未決の日中戦争とその根源

ここで〈戦争の呼称〉について筆者なりの付言をしておきたい。日中戦争は当初の「盧溝橋事件」から「日華事変」「支那事変」に変わるも一貫して「戦争」という呼称を用いることはなかった。「事変」とは「警察力では抑え切れず、軍隊の出動を必要とするほどに拡大した騒乱」乃至「宣戦布告なしに行われる国家間の戦闘行為」を意味する（『大辞泉』小学館、二〇一二など）。あいまいな宣戦布告なしの戦闘は、その後、真珠湾攻撃にも継承された。時間差攻撃である。これは決断が遅れがちな日本人の習性でもあった。浙贛作戦、武漢作戦のように「作戦」という名称は使われても戦争という呼称で取り上げられるようになったのは戦後のことである。宣戦布告なしの戦闘を「戦争」と意義づけることはなかった。

だが、ここに呼称の原初的、根源的な問題点がある。

図 1は戦争の呼称をめぐる日本と中国の観点、また戦争の期間における名称の変遷について図示を試みたものだが、こうした認識の乖離が現在もなお、双方の戦後問題、戦争処理問題を混迷にしているように思われる。すなわち、「日中戦争」という呼称は、少なくとも中国において使用される際は日本で言うところの「日清戦争」を指し、（中国では正確には「日中甲午戦争」という）、略して「日中戦争」と称するのが一般である。つまり、日本人が用いる「日中戦争」と中国人が認識する「日中戦争」とは相応の隔たりがあり、感情の齟齬を引き起こしているように思われる。

一方、日本でいう日中戦争は中国でどう呼称されるかといえば、「抗日戦争」である。たしかに「日中戦争」「中日戦争」と日本と中国を入れ替えたとしても、これらの呼称では対等に戦った、という印象がいなめない。中国の立場としては侵略戦争の意味を正しく伝えるには、中国共産党歴史観から見ても「反ファシズム抗日戦争」と称する以外にない。そして、日本側では一九三一年九月一八日の満洲事変にはじまり、敗戦の一九四五年八月一五日までの戦時期を、今日では「アジア太平洋十五年戦争」と称することが多くなった。しかし、これでは十五年という時間はカバーできたとしても「アジア太平洋」に隠れてしまって中国があらわれてこない。また、「日中戦争」「太平洋戦争」という呼称を〈自虐史観〉と片付け、当時の呼称「支那事変」「大東亜戦争」をそのまま用いる歴史家も依然として少なくない。さらに、今の世代は日本がアメリカを相手に戦争にしたことはおろか、中国と戦争をしたことも知らない世代も増えている。その背景の一つにこうした戦争の呼称の問題が介在しているようにも思われる。歴史教育の基幹的課題であるが、日中戦争は十五年続いており、その過程でアジア太平洋戦争が連続して繰り広げられていったことを強く認識すべきであろう。

こうした認識の齟齬が、未だ終わらぬ精神的な日中戦争の背景にあるともいえる。なお、戦争終結時点については、終戦詔書発布が八月一四日、無条件降伏が一五日、関東軍降伏が八月一九日、ミズーリ号調印が九月三日、支那派遣軍降伏が同九日であることから、中国側では日中戦争は一九三一年九月一八日から一九四五年九月九日までの五〇八〇余日の戦闘期間とする見方もある。

名称はときとして真実を投影しない不条理なもので、日本から見れば「日中」が、中国から見れば「中日」となる。もし「日中戦争」（日本が中国と戦った戦争）が「中日戦争」（中国が日本と闘った戦争）と等価であるとするなら、「抗日」は「抗中」としなければならない主張も出て来るかも知れない。そしてここには自衛のための「聖戦」か「侵略」かという戦争史観も投影されかねない。しばしば歴史認識をめぐる日中の論争の中心点がここにある。

古屋（一九八五）は、多くの日本人（歴史研究者にすら）に共有されていない体験であるとして、未決の日中戦争という「負」の遺産を次のように述べている。

> 一九三一年の柳条湖事件から、一九四五年の日本の降伏まで、足かけ一五年という計算の仕方でゆくと、それから七八年の平和友好条約まで、三四年が過ぎ去っている。そしてこの間に、日中戦争は清算されることなく、ただ忘れられていったのではないであろうか。日中戦争をおこした日本人の中国観や、思考や行動の様式は、どこまで確認され解体されているのであろうか。
>
> 近代日本の最大の戦争であった日中戦争は、われわれに大きな負の遺産を残しているにちがいないのであり、われわれは、現在も、それがまだ清算しきれていないことを自覚していなければならないように思われるのである。

戦争は二国間の敵味方が「対等」に戦うことで、侵略戦争と意義づける中国では「抗日戦争」であり、「日中戦争」も「中日戦争」も許容されない。こうした感情の溝を埋めるためにも、そして未決の「負の遺産」を埋めるためにも、文学作品に刻まれた戦争記憶から戦争の内実を省察してみる作業は、歴史をトータルにとらえるための〈人間感情史〉の発掘作業としても意義づけられるだろう。

三．戦争文学の現代（史）的課題

三・一　今、なぜいま「戦争文学の時代」か

これまで戦争文学の探究については夥しいほどの蓄積があり、竹長（一九七六）のような、古くは透谷や漱石の戦争観を俯瞰したものもある。振り返れば「アジア太平洋十五年戦争」以前にも日清・日露戦争、シベリア出兵と、日本は近代国家建設の途上で帝国主義の時代潮流に併呑され、戦争の世紀に突入した。戦争は大義の聖戦をかかげ、その結果、多くの惨禍、苦難を自国民、他国民に強いたのである。この五十余年におよぶ対外戦争の歴史を思想的、社会的背景にもつ日本に戦争文学の風土・土壌が醸成されていったのは、むしろ当然の帰結であったといえよう。

二〇〇〇年代に入って、戦争文学が語られ始めた背景には戦争が身近なものとして報道されるようになった。これはグローバル化の進行もあって、世界各地で戦乱、内乱がリアルタイムで報道され、またテロの脅威なども身近に起きていることがあげられる。また、時間が経過して、戦争の記憶が長期のトラウマとなって、いま体験を書いておきたい、残しておきたいという思いが湧き立っていることもあるだろう。そうしたなか、東日本大震災の発生は戦争とは次元、性格を異にしながらも人間の生死、避難行、避難地での差別、自殺、絶望といった普遍的な人間の感情を共有せしめることになった。今後、こうした企画は組まれることはないだろうといわれるコレクション（『戦争×文学』）全二一巻が二〇一一年から二〇一三年にかけて集英社から刊行されたのも象徴的な現象であった[注(8)]。

このコレクションの第七巻『日中戦争』（二〇一一・一二、解説＝浅田次郎）には**表1**のような作品が収録されている。この中には、小説ではなく評論、手記として小林秀雄、和辻哲郎といった評論家、哲学者の文章も散見される。

さらに本巻のリード文には「一九三七年七月七日、盧溝橋から始まった日中戦争。次第に泥沼化する戦争のなかに生きる兵士と住民たちの悲劇」とあり、帯には「泥濘の叫び、黄塵の輝き」と書かれている。「泥沼化する」は「侵略が拡大する」であり、「戦争に生きる兵士」は「戦場に投げ込まれた兵士」であり、「住民たちの悲劇」は「無辜の民衆の惨劇」であるはずである。さらに帯の「泥濘の叫び」は「泥濘のなかの生死」であり、「黄塵の輝き」は「黄塵のなかの絶望」と書かれるべきであった。こうした解説にも戦争に対する言語的感受の限界性が見える。

このほか第一二巻【テーマ編】『戦争の深淵』（二〇一三、解説＝高橋敏夫）には次のような解題がある。「住民虐殺、毒ガス、捕虜の生体実験。

人間はいかなる状況のもとで獣と化すのか。戦争の非人間性の極みを直視、戦争の非人間性をあばく！ 銃後の生活と軍隊の諸相」。このなかには平林たい子『盲中国兵』、田村泰次郎『裸女のいる隊列』が収録されていることに注目すべきであろう。

なお、別巻『〈戦争と文学〉の一五〇年』（二〇一三・九）には論考「日中戦争の時代」（著者中谷いずみ）が収められているが、この概観から何を探るかは大きな課題である。高崎隆信の厖大な研究をふまえながら、また、中国戦線の領域的な意味（戦時下、戦線、戦場）を、荒井（二〇〇七）が試みた方法論をも援用して、さらなる深みへと下りていかねばならない。

では、それまで戦争文学はどう認識されていたのだろうか。東京オリンピックの年、一九六四年（昭和三九年）に同じく集英社から『昭和戦争文学全集』全一六巻が刊行されている。戦後二十年、戦争の記憶が風化する危機感のなかで、「戦争の真実を〝肌〟で、作家・報道・銃後の三部から」編集、「この全集を〝歴史観〟にして「深い断絶の底で理解を期待」した。座談会〈村上兵衛・杉本苑子・尾崎秀樹〉は「むずかしい生きた戦争体験の継承」を感じつつも「若い世代に伝える」努力を語っている[注(9)]。新聞の一面を飾った広告は、この企画の、そして戦争文学、戦争記録が、日本人の精神史にあたえる影響がいかに大きいかを物語っていないだろうか。

とりわけ中国大陸を戦場とする巻二『中国への進撃』などに収録された作品は前掲**表2**のようであった。定番のごとく林芙美子、火野葦平に至っては三篇が収録されている。この時代では約五十年後のコレクション「戦争×文学」に収録された田村泰次郎、平林たい子、石川達三らの作品、すなわち加害意識に裏付けられた作品にはまだ射程が及ばなかった点に注目したい。また、『全集現代文学の発見』（責任編集・大岡昇平、平野謙、佐々木基一、埴谷雄高、花田清輝　二〇〇四、学芸書林新装版）では第⑩巻「証言としての文学」第⑦⑧巻に「存在の探究」、第⑫巻「歴史への視点」に日中戦争をモチーフにした作品が収録されている。だが、ここには残念なことながら、台湾や南方（東南アジア）における戦線、日常についてはほぼ収録されてはいない。井伏鱒二、高見順をはじめ、夥しい従軍作家の派遣、描かれた民衆の生態、兵士の絶望と侵略の擬態は、少なくとも一九八〇年代以降にならなければ、文壇の日本文学史においてさえ、日陰に据え置かれたのである。この事実はまさに現代日本文学史の空白ともいえる対象で、今後もなさらなる研究がもとめられる。

三・二　日本文学の中の中国像

近代の日本文学が中国をはじめ、アジアをどのように描いたかは、文学史の大問題であって、そのもっとも象徴的な姿態は戦時中の描写に凝縮されるのだが、その下地として連綿と続く中国への眼差しがあったことは当然のことであった。ここでいう文学者は詩人・画家もふくめ、一般に文化人と称される当代の著名知識人である。村松定孝・紅野敏郎・吉田熙生編（一九七五）『近代日本文学における中国像』（有斐閣選書）は恐らく日中国交正常化の機運を背景に文学における空白を見直す作業でもあった。さて、**表3**および**表4**は採録作家、作品を一覧化したものである。

表 1　集英社『戦争×文学』第 7 巻「日中戦争」（2011）の収録作品と作家

ジャンル	作品名	作者	発表・刊行年
説話	東干	胡桃沢耕史	1961. 4
評論	文化的創造に携わる者の立場	和辻哲郎	1937. 9
評論	戦争について	小林秀雄	1937.11
小説	呉淞クリーク◎	日比野士朗◎	1939. 2
小説	五人の補充将校	石川達三	1939. 7
小説	手記	武田麟太郎	1933.12
小説	煙草と兵隊	火野葦平	1939. 1
小説	鈴の音	田中英光◎	1941. 5
小説	黄土の記憶	伊藤桂一	1961. 4
小説	犬の血	藤枝静男	1956.12
小説	照る陽の庭	壇一雄	1949. 1
小説	脱出	駒田信二	1948. 7
小説	蝗	田村泰次郎◎	1964. 9
小説	岩塩の袋	田中小実昌	1978. 6
小説	崖長英	富士正晴	1958. 1
小説	軍犬一等兵	棟田博◎	1954. 6
小説	不帰の暦	五味川純平	1977. 6
小説	蝙蝠	阿川弘之	1948.11

*全収録作品のうち、戦時期に発表されたのが 7 作品、戦後に書かれたものが 11 作品。

表 2　『昭和戦争文学全集』（1964）に収録された日中戦争関連の作家・作品

作家	作品	作家	作品
尾崎士郎	『悲風千里』（2）	岸田国士	『従軍五十日』
日比野士朗◎	『呉淞クリーク』◎	山中貞雄	『陣中日誌』
藤田実彦	『戦車戦記』	上田廣	『建設戦記』
棟田博◎	『分隊長の手記』	瀧井孝作	『戦場風景』
火野葦平◎	『麦と兵隊』『一週間』『戦友に問う』	林芙美子◎	『北岸部隊』
石川達三	『生きてゐる兵隊』（8）	駒田信二	『脱出』
伊藤桂一	『雲と植物の世界』、『蛍の河』	武田泰淳	『審判』　他
小島信夫	『小銃』、『燕京大学部隊』（7）	駒田信二	『脱出』

*（2）『中国への進軍』、（7）『軍隊の生活』、（8）『果てしなき中国戦線』
表 1 とも◎は集英社『戦争×文学』（2011）と重複作家・作品

表 3　［昭和（戦前・戦中における中国像）］

作者	作品	作者	作品
横光利一	上海	火野葦平	麦と兵隊
黒島伝治	武装せる市街	尾崎士郎	悲風千里
里村欣三	苦力頭の表情	上田広	黄塵
前田河広一郎	支那	保田与重郎	蒙彊
平林たい子	敷設列車	金子光晴	没法子―天津にて
伊藤永之介	万宝山	小林秀雄	蘇州
久保栄	中国湖南省	和田伝	大日向村
林房雄	上海戦線と青年の国	島木健作	満洲紀行
阿部知二	北京	小田嶽夫	城外
石川達三	生きてゐる兵隊	八木義徳	劉廣福
竹内好	魯迅	武田泰淳	司馬遷

表 4　［戦後の文学における中国像］

作者	作品	作者	作品
田村泰次郎	残酷な顔の女	安部公房	けものたちは故郷をめざす
伊藤桂一	東洋への郷愁	木山捷平	長春五馬路
富士正晴	一夜の宿他	本多秋五	重慶の印象
堀田善衛	歴史、時間	草野心平	点・線・天
五味川純平	人間の条件	中野重治	中国の旅

ここには明らかに作品、作家に偏りがみられ、日本人の目を通して被害的な視線で描いている描写が少なくない。戦争責任、歴史省察に対する葛藤ないし抵抗は必ずしも感じられない。こうした点からも、今後さまざまな角度から収録作品の〈妥当性〉を検証していく必要がある(注10)。

一方、先に挙げた「戦争×文学」とは異なった切り取り方をしたものに、「帝国 戦争と文学」全三十巻（［監修］岩淵宏子、長谷川啓　二〇〇四―二〇〇五、ゆまに書房）がある。満洲事変から太平洋戦争までの実録小説（全編）をあつかっているが、短篇ではなく単行本全体を復刻した。これまでほとんど日の当たらなかった作家、単行本長篇作品を収めているのが特色である。「いま問い直す戦時下の「国民」と「文学」」というキャッチコピーで編集趣旨は次のように描かれている(注11)。

満洲事変～太平洋戦争期に刊行された小説・詩集・ルポ・従軍記などの単行本を精選して復刻。文学者のみならず、兵士、従軍看護婦、戦争未亡人、市井の一般庶民など、さまざまな階層のひとびとと戦争との関わりが一望できる叢書です。十五年戦争下で、国民がいかに戦争の波に巻き込まれ、加担していったかを検証していくための貴重資料。

だが、こうした視点は日中に共有されるものだろうか。文学作品の復刻は次世代への継承という意義を持つが、『満洲開拓文学選集』などもあわせて、心情的な理解共有がどこまで可能なのか、議論される必要があるだろう。収録された作品群を次頁**表5**に一覧化したが、同**図2**に示した戦争文学の分類を精査しつつ、収録作品のそれぞれについても正確な鑑賞の視座がもとめられる。

くわえて、近年従軍作家の検証が進んでいるが、次のような宣撫工作に従事した作家、作品にも注視する必要があろう。

中野太郎（一九三九）『宣撫官』（週刊朝日懸賞小説選「事実小説」）、スピークマン書店復刻（二〇〇六）／上田廣（一九三九）『建設戦記』、改造社、同（一九四〇）『続建設戦記』、改造社）／上田廣（一九四〇）『りんふん戦話集』、河出書房／山本和夫（一九四〇）『青衣の姑娘』、河出書房／小島利八郎（一九四二）『宣撫官』、錦城出版社　五千部

四．おわりに――日中和解と〝平和資源〟としての文学の共有をもとめて

夥しい戦争文学の作品群から何を読み取り、時代体験を継承すべきであろうか。多くの作品のなかでもある種の普遍的な視線、価値観が散見されるのもまた事実であろう。また、一方で、書かれなかった、書こうとしてもまだ熟さなかった心情をも読み解く作業こそが重要なのかもしれない(注12)。ただ、残虐性のみを伝えることはやさしいし、他者を攻撃する態度は英雄的でもあるが、少なくとも未来を展望する視野は拓かれない。で

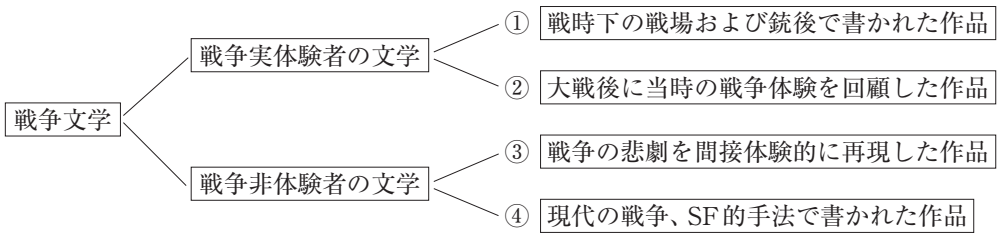

図 2　戦争文学の分類・分割図

表 5　『帝国 戦争と文学』全 30 巻の収録作品一覧

巻	書名	作者	出版・発行所	刊行年
01	『男装従軍記』	永田美那子	日本評論社	昭和 7 年
02	『満洲国（まんちうくう）』	長谷川春子	三笠書房	昭和 10 年
03	『婦人従軍記』	山岸多嘉子	中央公論社	昭和 12 年
04	『花ひらく亜細亜』	北林透馬	紫文閣	昭和 14 年
05	『従軍日記』	井上友一郎	竹村書房	昭和 14 年
06	『大陸の花嫁』	林房雄	第一書房	昭和 14 年
07	『大空の遺書』	間瀬一恵	興亜出版社	昭和 15 年
08	『強い男』 『銃について』	田村泰次郎 田村泰次郎	昭和書房 高山書院	昭和 15 年 昭和 16 年
09	『抗日兵の手記』 『戦ふ半島志願兵』	李如雲 大村謙三	日比谷出版社 東都書房	昭和 15 年 昭和 18 年
10	『満支紀行　和平来々』	鷲尾よし子	牧書房	昭和 16 年
11	『民族の母』	松永健哉	四季書房	昭和 16 年
12	『軍靴の響』	千葉泰子	スメル書房	昭和 16 年
13	『理恵子の手帖』	田郷虎雄	実業之日本社	昭和 16 年
14	『白衣の船』	依田よしゑ	文晃書院	昭和 16 年
15	『蘇州の夜』	川口松太郎	矢貴書店	昭和 16 年
16	『中華理髪店』	棟田博	新小説社	昭和 16 年
17	『みなみ』	中地清	矢貴書店	昭和 17 年
18	『花束』	軍人援護会東京支部編	軍人援護会東京支部	昭和 17 年
19	『晴れ渡る仏印』	森三千代	室戸書房	昭和 17 年
20	『蕾物語』	由利聖子	実業之日本社	昭和 17 年
21	『赤道祭』 『沈まぬ船』	深尾須磨子 深尾須磨子	鶴書房 一條書房	昭和 17 年 昭和 18 年
22	『南京偵緝隊』	清水国治	東光堂	昭和 17 年
23	『民族のともしび』	柳原火華子（白蓮）	奥川書房	昭和 18 年
24	『永遠の義兄弟』	山中峯太郎	拓南社	昭和 18 年
25	『日本の母』	日本文学報国会編	春陽堂書店	昭和 18 年
24	『日本の母』	進藤喜美	富文館	昭和 18 年
26	『辻小説集』	日本文学報国会編	八紘社杉山書店	昭和 18 年
27	『熱風』	岩下俊作	工人社	昭和 18 年
28	『大東亜戦争歌集』	日本文学報国会編	協栄出版社	昭和 18 年
29	『辻詩集』	日本文学報国会編	八紘社杉山書店	昭和 18 年
30	『スマトラ従軍記』	大辻司郎	非凡閣	昭和 18 年

は、どうすればよいのか。また、同時に、中国語で書かれた多くの作品については、ほとんど日本に紹介されていないが、両者の突き合わせによって、戦争の実態、リアリティがいっそう深まって見えてくることだろう。望むらくはこうした作品集の版を重ねることによって、日中の文学者による戦争文学の研究（具体的には中国語・日本語翻訳作業）が進むことを期待したい。そうした相互理解に基づく共同作業を通じて、日本人の戦争観を明らかにし、冒頭述べた〝平和資源〟としての戦争文学の意義づけもなされるはずである。

二〇一七年は日中戦争勃発から八十年と同時に、日中国交回復から四十五年の節目であった。四十五年前、日中両民衆は日中戦争の総括をどのように認識したのだったか。振り返れば一九七二年の日中国交回復は〈早すぎた回復〉であった。本多勝一の『中国への旅』が朝日新聞に連載されたのは一九七一年であり、『三光作戦』が世に問われたのは、その後であった[注13]。森村誠一の『悪魔の飽食』によって秘匿部隊「七三一部隊」の罪行が白日のもとにさらされたのは一九八一年のことであった。すでに戦争責任問題として存在した中国人強制連行問題以後、重慶爆撃裁判、細菌戦、毒ガス戦被害者など戦争被害者訴訟の問題が浮上してきたのは二〇〇〇年代であり、その〈後遺症〉は現在進行形である。今もなお精神的戦争（感情）は続いているこうして、日本人の戦争責任問題が十分に問われないままに急がれた「早すぎた回復」の「ツケ」が長く尾を引いている。いまだ、日中間の精神的なわだかまりが「回復」もされなければ「解消」もなされぬまま今後に引き継がれようとしている。この現実を再認識すると同時に、歴史教育の現場で、また文学者間の交流の中で常に理解努力を進めていくことが重要である。

いずれ戦争の実体験者が消滅する日がやってくる。それは戦争がなく平和であることをも意味するのだろうか。その一方で「戦争はなかった」という忘却に覆われかねない時代ともなりかねない。修正主義は常に写実主義の背後につきまとう。小松左京「戦争はなかった」（一九七四）が書かれた時代から四十数年、さらにそうした思いは加速しているといわねばならない。体験者がなくなれば、そしてこの平和と繁栄を持続させていくには、互いに憎悪をせり上げるのではなく、理知的な解決法をもとめるべきであろう。そして、つねに原点として、記憶を呼び戻す装置としての資源から学んで行かねばならない[注14]。中国における日中戦争を題材にした作品が〈抗日映画・ドラマ〉と同様に、〈抗日文学〉のような〈官制文学〉として出口のないプロパガンダをあおる憎悪感情に収斂していく限り、日中の溝は永遠に埋まらないことは明白である。文学においてもこうした時代の閉塞感から出口を見出す努力が日中双方において求められている。

附記：本稿は【盧溝橋事件八〇年国際シンポジウム】二〇一七・七・一　日本華人学術会議・明治学院大学での発表原稿をもとにしている。戦争文学の作品については早稲田大学中央図書館から文献資料提供の便宜を得たことに心から感謝申し上げる。小文を長く親交のあった、敬愛する故歩平氏（中国社会科学院近代史研究所元所長、二〇一六年八月一四日逝去）に捧げる。

注

(1) 筆者はここ数年、学部生を対象に「戦争と文学」の講義を担当している。本稿はその報告記録でもある。

(2) 戦前、戦時下では新興俳句として、戦争が尖鋭的心的題材の一つとしてとりあげられた。樽見〈二〇一四〉。

(3) 膨大な量であるが、国民に膾炙する目的で組まれた「愛国百人一首」なども含め、いずれこうした「大東亜歌詠集成」を編集し、そこにあらわれた日本人の心情を検証する作業も不可欠であろう。なお、この方面の研究として、中野（二〇一〇）のほかにも近藤芳美（一九九一）、早坂隆（二〇〇七）、樽見博（二〇一五）などを参照。土屋文明、土岐善麿、松村英一編集顧問『昭和万葉集』（講談社、一九七九―一九八〇）は全二十巻別巻一巻、総八万二千首。特に第四巻（一九三七―一九三九）、第五巻（一九四〇―一九四一）、第六巻（一九四二―一九四四）、第七巻（一九四五―一九四七）に戦争短歌を多数収録。このほか、佐佐木信綱・伊藤嘉夫編（一九四三）、『傷痍軍人聖戦歌集』第一輯人文書院、由利貞三編（一九四二）、『白衣勇士誠忠歌集　昭和万葉集』日本皇道歌会、中河幹子編（一九四三）、『傷兵歌集』第一輯　報国社版などをはじめ、傷痍軍人（白衣勇士）や従軍看護婦らの戦争詠も刊行された。

(4) 日本文学研究者ドナルド・キーン（二〇一一）は俳句、短歌などの伝統的に日本人の間にひろまった詠歌現象について日本人の生命観、観察癖をあげている。兵士の軍隊手帖、陣中日記には戦場の苦悶の吐露が綴られた。

(5) 齋藤瀏（一八七九・四・一六―一九五三・七・五）は長野県出身。陸軍大学校卒。旧姓は三宅。随筆に「獄中の記」など。明治―昭和時代の軍人、歌人。昭和2年陸軍少将。歩兵第十一旅団長として三年中国山東出兵に参加、済南事件にかかわり五年予備役となる。二・二六事件で反乱軍を援助して連座、入獄。禁錮五年の刑を受けた。佐佐木信綱に師事し、「短歌人」を主宰。著書に『獄中の記』『慟哭』等がある。なお、鶴岡（一九七一）の巻末には詳細な戦争詩・年表を収録する。日本の近代詩のなかで戦争詩をとらえた坪井（一九九七）も参照。

(6) 井上靖（一九〇七―一九九一）は戦後平山郁夫らとともに日中文化交流に尽力し、いまなお中国にも広い読者をもつ日本を代表する作家である。一九七六年には文化功労者、文化勲章受章者。一九三六年に京都帝大を卒業後、大阪毎日新聞社に入社、学芸部に配属され日中戦争により召集をうけ出征するも翌年病気のために除隊、再度学芸部に配属されたが、本詩はその銃後で創作された。世界平和アピール七人委員会の委員を務めたり、また晩年には日本ペンクラブ会長などもつとめたりした。北京大学より名誉博士号を授与されている。

(7) 東日本大震災（二〇一一・三・一一）後の復興を旗印に、国民意識発揚の意味も込めて多くの詩歌が詠われたことも想起したい。同時に、震災を契機に戦争文学の再検討が始まったことは、戦争と震災の相関を人間世界の破壊という見地からの試みであり、今後、なお十分な議論が必要であろう。

(8) 本コレクションの編集委員はすべて戦後生まれの戦争未体験者である。

(9)『週刊読書人』（一九六四・八・一七）。本全集の編集委員は「コレクション戦争×文学」と異なり、阿川弘之、大岡昇平、奥野健男、橋川文三、村上兵衛といった全員が戦争（戦場）体験者であった。

(10) 表中の刊行年には若干の異同がある。また雑誌発表時と単行本刊行時とのずれもある。

(11) たとえば「満洲開拓文学」といったジャンルは中国側では侵略期（淪陥期）文学であり、これの存在を肯定することは自国の歴史観と相矛盾することになり、比較考察はきわめて困難で慎重を要する。

(12)「和解」についての筆者私見は田中（二〇一七）の一連の省察を参照。「和解」については「日米和解」「日英和解」「日豪和解」などの和解とは大きな精神的隔たりがあることを銘記すべきである。

(13)『三光』の出版経緯は以下の通り。神吉晴夫編『三光　日本人の中国における戦争犯罪の告白』（光文社カッパ・ブックス、一九五七年）中国帰還者連絡会編『新編三光　中国で、日本人は何をしたか　衝撃の告白手記　第1集』（光文社 Kappa novels ドキュメントシリーズ、一九八二年八月）中国帰還者連絡会編『三光　完全版三光』（晩声社、一九八四年五月）

(14) 戦争記憶については和賀井（二〇一七）などを参照。筆者の中国体験は戦争体験を学ぶことと不可分の関係にあるが、それは現地での体験が大きな背景になっている。

参考文献（注にあげた文献資料は省略）著編者五十音順

日本語文献（研究書、作品集をふくむ）

秋葉四郎（二〇一二）『茂吉幻の歌集「萬軍」――戦争と齋藤茂吉』、岩波書店

芦谷信和他編（一九九二）『作家のアジア体験　近代日本文学の陰画』、世界思想社

荒井とみよ（二〇〇七）『中国戦線はどう描かれたか　従軍記を読む』、岩波書店

板垣直子（一九四三）『現代日本の戦争文学』、六興商会出版部

伊藤桂一（二〇一〇）『私の戦旅歌』、講談社文芸文庫

井上俊夫（二〇〇五）『初めて人を殺す　老日本兵の戦争論』、岩波現代文庫

今村冬三（一九八九）『幻影解「太平洋戦争」――戦争に向き合った詩人たち』、葦書房

岩淵宏子・長谷川啓監修（二〇〇八）『「帝国」戦争と文学』全30巻、ゆまに書房

宇多喜代子（二〇〇六）『ひとたばの手紙から　戦火をみつめた俳人たち』、角川ソフィア文庫

岡田年正（二〇一四）『大東亜戦争と高村幸太郎――誰も書かなかった日本近代史』、ハート出版
小野忍・祖父江昭二・丸山昇編（一九七二）「戦後日本文学の中国像・作品目録　その一・草案」、『和光大学文学部紀要』6　pp.25-36
小野忍・祖父江昭二・丸山昇編（一九七五）「近代文学にあらわれた中国像・作品目録（年表）その一・草案」、『和光大学文学部紀要』7.8.9　pp.101-159
北原白秋（一九七二）『童謡集』大東亜戦争少国民詩集
木村朗子（二〇一三）『震災後文学論　あたらしい日本文学のために』、青土社
黒古一夫（二〇〇五）『戦争は文学にどう描かれてきたか』、八潮社
――（二〇一四）『井伏鱒二と戦争――『花の街』から『黒い雨』まで』、彩流社
櫻本富雄（一九九五）『日本文学報国会　大東亜戦争下の文学者たち』、青木書店
佐藤康正編（二〇〇一）『戦争と文学』、梅光学院大学公開講座論集、笠間書院
志賀直哉・佐藤春夫・川端康成監修（一九七一）『世界紀行文学全集　中国Ⅰ、Ⅱ』、修道社
史桂芳（二〇一〇）「中国における日中戦争について―視点と成果―」、大阪大学中国文化フォーラム・デスカッションペーパー　2010.12.10
講談社編（一九七九―一九八〇）『昭和万葉集』巻二、巻三、巻四、巻五、巻六　講談社
新藤謙（二〇一六）『体感する戦争文学』、彩流社
瀬尾育生（二〇〇六）『戦争詩論』、平凡社
千年紀文学の会編（二〇〇七）『体験なき「戦争文学」と戦争の記憶』、晧星社
杉野要吉（二〇〇〇）『淪陥期北京 1931 ― 1945　交争する中国文学と日本文学』、三元社
太平洋戦争研究会編（二〇一〇）『キーワード日中全面戦争』、新人物往来社
滝本博（二〇一一）『高校生のための昭和万葉俳句集―日本国民の太平洋戦争「一億の慟哭」を詠う』、新風書房
高崎隆治編（一九七一）『戦争文学文献目録』、戦争文学研究会（非売品）
――（一九七二）『戦争文学文献解題四』、戦争文学研究会（非売品）
――（一九七二）『戦争文学文献解題五』、戦争文学研究会（非売品）
高崎隆治（一九七七）『戦争文学通信』、風媒社
――（一九八一）『戦時下文学の周辺』、風媒社

――（一九八六）『戦争と戦争文学と』、日本図書センター
――（一九八七）『戦争詩歌集事典』、日本図書センター
――（一九九五）『戦場の女流作家たち』、論創社
竹長吉正（一九七六）『日本近代戦争文学史―透谷・漱石・花袋・伝治を中心に―』、笠間書院
田中克己ら（二〇〇六）『大東亜戦争詩文集』（近代浪漫派文庫㊱）、新学社
田中寛（二〇〇四）『「負」の遺産を越えて』（私家版）
――（二〇一〇）『戦争記憶と歴史認識　未決の戦争責任・戦後責任論のために』（私家版）
――（二〇一七a）「ロンドンで考えたこと：戦争と平和、日中和解への道をもとめて」、『新世紀人文学論究』Vol.1　新世紀人文学研究会 pp.133-136
――（二〇一七b）「日中国交回復と日中戦争の代償」、『ABC企画NEWS』第一〇九号、ABC企画委員会
玉居子精宏（二〇一五）『戦争小説家　古山高麗雄伝』、平凡社
樽見博（二〇一四）『戦争俳句と俳人たち』、トランスビュー
張競、村田雄二郎編『侮中と抗日　一九三七―一九四四』日中の一二〇年文藝・評論作品選3、岩波書店
坪井秀人（一九九七）『声の祝祭　日本近代詩と戦争』、名古屋大学出版会
――（二〇〇五）『戦争の記憶をさかのぼる』、ちくま新書　552
鶴岡善久（一九七一）『太平洋戦争下の詩と思想』、昭森社
ドナルド・キーン著、金関寿夫訳（二〇一一）『このひとすじにつながりて』、朝日新聞社
ドナルド・キーン著、角地幸男・松宮志朗訳（二〇一二）『日本人の戦争』ドナルド・キーン著作集第五巻、新潮社
中野敏男（二〇一二）『詩歌と戦争　白秋と民衆、総力戦への「道」』、NHKブックス
西原和海監修（二〇一〇）『満洲開拓文学選集』全18巻、ゆまに書房
早坂隆（二〇〇八）『兵隊万葉集』、幻灯舎新書
火野葦平（二〇一四）『火野葦平戦争文学選』、社会評論社　第五巻　海と兵隊、悲しき兵隊
藤井忠俊（二〇〇〇）『兵たちの戦争　手紙・日記・体験記を読み解く』、朝日新聞社
古屋哲夫（一九八五）『日中戦争』、岩波新書

堀内統義（二〇一六）『戦争・詩・時代　平和が平和であるために』、創風社出版
水上勉（二〇〇八）『水上勉作品集　日本の戦争』、新日本出版社
宮尾節子（二〇一四）『宮尾節子アンソロジー――明日戦争がはじまる』、集英社インターナショナル
宮柊二（一九九五）『歌集山西省』、短歌新聞社
村松定孝・紅野敏郎・吉田熙生編（一九七五）『近代日本文学における中国像』、有斐閣選書
矢野貫一（二〇一四）『近代戦争文学事典』第十三輯など　和泉書院（第一輯は一九九二年）
山中恒（二〇〇八）『反日という呪縛』、辺境社
吉田裕（一九九六）『日本人の戦争観　戦後史のなかの変容』、岩波書店
呂元明著、西田勝訳（二〇〇一）『中国語で遺された日本文学　日中戦争の中で』、法政大学出版局
和賀井倫雄（二〇一七）「『語りつぐ戦争』にみる日本人の戦争記憶―『被害』の中の『加害』意識―」、『新世紀人文学論究』、新世紀人文学研究会、創刊号　pp.107-132
渡部良三（二〇一一）『歌集　小さな抵抗――殺戮を拒んだ日本兵』岩波現代文庫

中国語文献（一部）
王向遠（一九九九）《〝筆部隊〟和侵華戦争――対日本侵華文学的研究與批判》、北京師範大学、日本対中国的文化侵略研究叢書（昆崙出版社二〇〇五）再版
《中国抗日戦争時期大後方文学書系》、中国・重慶出版社　理論・論争、小説、報告文学、散文・雑文、戯劇一九八九
銭理群主編（一九九八）《中国淪陥区文学体系》（新文藝小説・散文・詩歌・通俗小説・演劇）広西教育出版社　全七巻
胡連成（二〇〇九）《昭和史的証言――戦時体制下的日本文学（一九三一～一九四五）》、中国・吉林大学出版社
史桂芳（二〇〇九）《近代日本人的中国観與中日関係》、社会科学文献出版社

（二〇一七年十月二十三日受理）